

和布刈祭祀の原型と変容

井上 孝夫

千葉大学・教育学部

The prototype and transformation of the Mekari ritual

INOUE Takao

Chiba University, Faculty of Education

安房一宮・安房神社に伝わるミカリ神事は忌部氏の祖神にゆかりの故事にまつわる祭祀として伝えられてきた。しかしその内実を検討してみると、長門一宮・住吉神社の御忌祭と和布刈祭が融合した形態であることに気がつく。この融合形態は上総地域から東京湾対岸の川崎、横浜、世田谷から、さらに府中にまで及び、ミカリ婆さんや一つ目の伝承へと変容する。その背景にあるのは、本格的な冬に向かう時期における生命力の復活への願いと製鉄作業の開始を告げるものと解釈することができる。

キーワード：ミカリ (Mikari ritual), 御斎祭 (Oimi ritual), 製鉄伝承 (Legends related to steelmaking)

第1節 問題の所在

年末に営まれる「ミカリ」の習俗について、それは年を送るにあたっての「身代わり」のことであるとする説に対しては、これまでも疑問を提示してきた (井上, 1998, 2009, 2011a, 2015, 2020)。

ここでは房総半島に伝わるミカリ神事の検討を出発点にして、この祭祀の広がりや踏まえ、その原型と変容の形態を改めて考えていくことにしたい。そしてそのうえで、この祭祀の基底に存在する基本的な観念を解明してみたい。

第2節 メカリとミカリ

1. 忌部氏の開拓伝承

千葉県のことを房総というが、房総とはこの地域をかつて安房国、総国とっていたことの名残である。この名称の由来について、館山市の安房神社には次のような伝承がある。

——神武天皇の命により、天富命の率いる忌部氏が四国の阿波から房総半島の南端、布良の海岸に上陸し、肥沃な土地を求めて開拓をすすめていった。彼らはここで、麻や穀を栽培した。そして「良い麻が育つ土地」という意味で、麻の古語である「総」の国と呼んだ——

現在の千葉県の一帯は総国とされていたが、「大化の改新」ののちに上総と下総に分かれる。そして8世紀にはいと、上総の南部にあった四郡を分離させて、安房

国が成立する。安房とは忌部氏の出発の地、四国の阿波に由来するものとされる。その後、天平年間(729-749年)に安房国は上総国に合併するが、これは一時的なものにとどまり、のちに再び分離する。

安房、上総、下総という地域区分は今日に至るまで受け継がれているが、その大元にあるのは忌部氏による開拓伝承だったわけで、忌部氏は千葉県の地域性に並々ならぬ影響を及ぼしている、とひとまずはみることができる。

2. ミカリ神事の謎

しかし忌部氏の伝承を調べるにつけ、房総の開拓を忌部氏の伝承ですべて括るのには無理があるのではないかと、という感もある。例えば忌部氏の遠祖・天太玉命を祀る安房神社には「ミカリ」という神事が伝えられているが、この神事の位置づけは、忌部氏だけでは解けない謎の一つである。

このミカリについて、『館山市史』は「神狩神事(安房神社)」の項で次のように記している。

「12月26日より3日間にわたって行われる。安房忌部の祖由布津主命が、この国土を経営された時に、野獣が多く田畑を荒らしたのでこれを狩猟したことから始まったと伝えられる。この日氏子等氏神にお籠りをして、これを行ない婦女子はこの時針を手にもたないのを例とした」(館山市史編纂委員会, 1971: 662, 原文のママ)。

ここでは、「ミカリ」と狩猟との関連が指摘され、さらに「ミカリ」とはすなわち「身変わり」だ、という大島建彦の解釈(大島, 1961)も提示されている。

また一説に、この神事の発祥の地は、長尾村(のち白浜町、現・南房総市)滝口だといわれるが、この滝口の

連絡先著者：井上孝夫 t-inoue@faculty.chiba-u.jp

ミカリについて、藤沢衛彦は『安房の巻』のなかでもう少し詳しく、次のように指摘している。

「長尾村滝口辺の俗に、11月27日の夜から、みかりとって、その土地土地の神社の籠堂へ、1週間男子の参籠することがある。そして、そのうちでも、27・28・29の3夜は、その式を、殊に嚴重に守り、明る30日の4つ前までは、山へ決して行かず、また、音も立てず、機織もしない。そのうちでも、此みかりの御籠を、最も嚴重に守るのは、滝口明神の村（氏子村）であるといふことである。此村の山奥に、一軒家があって、それをまかつたの嘉平といふ者の子孫と言って居る。此家の主人が祭りの時に出て来て、『まかつたの嘉平。』と呼ぶ声に応じて、鉄砲を持って出ると言うことである（石井常蔵氏話）が、『これには何か来歴あることと思はれる。』と山中翁（共古翁。）も疑はれていたやうであるが、これは、昔、滝口明神の御神が、狩猟せられた事によるものと思はれる。由布津主命は、此日、忌部の族を従へて天槍弓・天羽矢々を以て、庶民に害をなす猪鹿を狩せられた。今も此辺に、猪鹿塚と呼ばれる塚が残っているのは、その時の屍を埋めた所で、狩せられた山は、今も、鹿倉山といはれているといふことである。されば、此みかりの俗は、勿論御狩の事によるもので、まかつたの嘉平は、恐らく山案内人の獵夫ででもあったやうに思はれる」（藤沢編、1919：192-193、引用にあたっては原文中のルビは省略し、旧字は新字に改めた）。

この記述は大正時代までの様子に基づいた記述であるが、その内実は江戸時代に行なわれていた祭祀の様子を伝えている。文中の滝口明神は明治時代になってから、下立松原神社（南房総市白浜町滝口）とされ、ミカリ神事はそのまま受け継がれ「神狩神事」と表記されている。旧暦の11月26日から10日間行なわれるのだが、現地案内板には次のようにある。

「下立松原神社のミカリ神事は江戸時代（文化13年頃[1816年頃－引用者]）から行われたとされる。

『ミカリ』という名の由来は、古く由布津主命が天富命と一緒に安房に上陸し、農作物を荒らす猪や鹿を狩って退治したことによるといわれ、鹿倉山は狩りをした場所、頂上の石宮三社は狩りをした神々であるという。また、山頂で宮司が叫ぶ『曲田の小平』というのは、狩りを助けた者だと伝えられている。

ミカリ神事は旧暦11月26日の夜から十日間にわたって行われる。27日から3日間、宮司・氏子総代が社務所に籠もり、鹿倉山に行く。これを『サバシ参り』と称している。また、27日は『イチノビ（一の御日）』とって縄縋りをする。12月1日は『注連張り』とって『イチノビ』に縋った縄を注連にして本殿の奥から鳥居まで、参道に沿って千鳥掛けに張り、神前に白い強飯などが供えられる。

ミカリ神事の最終日である12月4日は、『夜明かし祭り』といい、前日からは神社役員の氏子総代も社務所に参籠し、夜になってから参道に大火を篝火として焚き、御霊が移された神輿が鳥居の先まで渡御し、お旅所の社

務所に入る。こうして、12月4日の夜明け前には神輿がお旅所から本殿に戻り、ミカリ神事は終わる。

下立松原神社のミカリ神事は今なお旧暦で神事が行われ、多少簡略化されてはいるものの、サバシ参り、縄縋り、夜明かし祭りの神事が現在も守られているなど、他の神社では失われたものが今も伝えられていて学問的にも貴重なものとされている。」

この二つの伝承を総合して考えてみると、いずれの伝承も由布津主命が主体となっていて、狩猟、特に鹿狩りの伝承が色濃い。そして伝承中にある鹿倉山への「サバシ参り」の「サバ」とはおそらく「諏訪」のことであり、これは諏訪神が狩猟の神であることに深くかかわっているはずである¹⁾。さらに、「まかつた」が「曲田」という実在する地名であることがわかる。

3. ミカリ神事の広がり

このミカリ神事は房総半島の南端にだけ伝わっているものではない。類似の伝承は上総地域にまで伝えられている。平野（1961）によれば、富来田町（現・木更津市）茅野の羽雄神社（羽雄大明神）、清和村（現・君津市）市場の諏訪神社、袖ヶ浦町（現・袖ヶ浦市）の坂戸神社、木更津市の笹子神社、豊田村（現・丸山町）の莫越山神社、夷隅郡豊浜村（現・勝浦市）部原（へばら）の滝口神社の伝承が指摘されている²⁾。そのほか、集落への伝承として、木更津市高柳では12月27日を「ミカリサマの日」といい、袖ヶ浦市三ツ作では12月26日をオミカリサマがやってくる日とする。さらに市原市五井では12月28日を「ミハリ」という（牧野、1995）。

平野によれば、ミカリ神事の由来についてはヤマトタケルの伝承からも捉えられるが、柳田国男は「身変わり」説を唱え、一般には「御狩り」説が有力で、「狩猟社会から農耕社会への移行において狩猟社会の古俗を残す」もの、といった位置づけを与えている（平野、1961）。

要するに、これらの解釈によれば、ミカリの神事は狩猟や身変わりに基づくもの、ということになるだろう。そして確かに、この地域に残されている資料からみれば、このような捉え方は妥当なものということもできる。

しかしその一方で、もし忌部氏がかかわる以前から何らかのかたちでミカリの伝承があったとすれば、それはどのようなものだったのだろうか。このような疑問が生じるのは、ミカリとよく似た神事がほかの地域にもみられるからである。

4. 関門海峡の和布刈神事

実のところ、ミカリと聞いて真っ先に思い浮かんだのは、関門海峡を挟んだ二つの神社（下関市の住吉神社と北九州市門司区の和布刈神社）に伝わる和布刈（メカリ）神事のことだった。ミカリとメカリ、発音が似ている。もしかしたら、もともと同一の神事だったと考えられるのではないかと、いうわけである。この点についてはすでに指摘してきたところであり、以下、（井上、1998：20-21）に基づいて再掲しておきたい。

—— 関門海峡に伝わる和布刈神事はいずれも、新し

い年を迎えるにあたって、神官が海中よりワカメを刈り取って神に捧げる、というものである。それは古来よりの海人族の信仰を受け継いでいる。ただし本州側の住吉神社の神事がいまだに秘事として厳格に行なわれているのに対して、九州側の和布刈神社の神事はオープンなものになっていて、新年を飾る新聞に写真入りで報道されることもある³⁾。

この和布刈神事は本来、年送りの神事である「御斎(オイミ)祭」と一体のものだったと考えられている(木村, 2010)。御斎祭というのは本州側・下関市の住吉神社(長門一宮)と忌宮(いみのみや)神社(長門二宮)に伝わるもので、毎年12月7日の夜から15日の朝にかけて、神職はお籠をし、神社の境内の周囲に注連縄を張り巡らせて外部からの参拝を禁止する。また神社の氏子も、仕事をやめて、静粛に過ごす⁴⁾。安房神社をはじめとする安房、上総に伝わるミカリと同系統の祭祀である――

これは要するに、一年を終えるに際して、日常の仕事も一時止めて、心静かに送ろう、という趣旨である。ただし、住吉神社の場合、期間中は「御斎の神様」が白馬に乗って、氏子たちが静粛にしているかどうか見回っていて、もし仕事をしているところをみつかり、石にさされてしまう、という。その石をオイミ岩というのだが、旧・勝山村(現・下関市)前勝谷のオイミ岩は古墳のうえに実在し、白馬の蹄の跡などが残されているという⁵⁾。

5. ミカリとメカリの共通性

関門海峡の和布刈祭を踏まえて安房神社をはじめとするミカリ神事を捉えてみると、その名称は新年を迎える神事、内実は年送りの神事、ということになる。つまり、新年を迎える神事が欠落して、実質は年送りの忌み籠りが残ったかたちになる。

もしそうだとすると、住吉神社と安房神社には何らかの結びつきがあるとみなさなければならない。それは一体何か。両神社とも海人族の信仰に基づいていることは間違いのないところである。ただ住吉神社は筒之男三神を祀り、安房神社は天太玉命を主祭神とする忌部系で、一見したところ関係性が見当たらない。とはいえ、河川の研究から導かれた次のような指摘はもっともということができるはずである。

まず安房神社の地理的な位置という観点からの推測である。

「安房神社は安房国府や安房国分寺とは離れて、その南の丘陵を隔てた太平洋岸にあり、旧官幣大社でもある。その位置と社格は律令制度の安房国が成立する前から、アヅミ族が神社を中心に住みついていたことを思わせる」(鈴木, 2003: 27)。

次に海人族の移動については、海岸河口部から河川を遡るというパターンがあるという指摘である。

「アヅミ族=アマベ族=インベ族の東京湾内の移動の仕方と同じような状況は、これも広く各地で知られている。西南日本から海岸づたいに、次々に生活適地を求め

た集団の『波』は、多くの場合、大小の河川の河口部に生活をくり広げる。次に渡来した集団は、さらにその先の海岸の河口部を求めて進むものと、取り付いた河口部から川をどこまでも遡るグループに分かれる」(鈴木, 2003: 26)。

とはいえ、ここで「インベ族」が登場するのはやや唐突な感じもある。おそらく東国への海人族の移動を一体化して捉えているからだろう。ただし、安曇氏と忌部氏の関係を示す実在的な根拠が欲しいところである。安房神社に限らず、房総半島の南端に位置する神社には忌部氏の伝承が濃厚に残っている。だがこの忌部一色はかえって怪しいのである。

そういった気持ちをもちつつ、実際に安房神社に行ってみて、忌部一色を突破する一つの手がかりを得たのだった。それは安房神社が鎮座する小高い山の名称が「吾谷(あづち)山」だったということである。

「吾谷」とは安土桃山時代というときの「安土」であり、「安土」はアドを漢字表記したものだだろう。安曇をアドと呼んだのである。ちなみに、安曇川と書いてアドガワと呼ぶ川が京都から琵琶湖へと流れている。このように考えると、アヅチはもとはアヅミだったのである。

こうして安房神社が鎮座する吾谷山が安曇氏の名を負っていることが明らかになった。安曇氏は九州北部の志賀島を本拠にし、その足跡は本州各地に及んでいる。一説に東国を意味する「あずま」はこの安曇氏に由来するものともいわれるほどである。この安曇氏に対して、筒之男三神を奉斎する住吉系海人は対馬・博多・長門・難波を拠点にしていた。この両者は伊邪那岐、伊邪那美の子であり、禊の際に海中から示現するのであり、密接な関係にある。両者に共通する「スミ」は「澄み」であり、海の穏やかな様子を示していると考えられる。このように考えると、安曇氏にも同様の祭祀があったのではないかと推測することができるはずである。

以上を踏まえていうと、安曇氏は房総半島にも足跡を残し、先住者として「オイミ・メカリ」の神事をもたらし、後続の忌部氏はメカリの名を残してオイミの神事のみを継承した、ということなのではないか、と考えることができるのである。

では、房総半島南端の地における安曇氏と忌部氏の習合はどのようなものだったのか。忌部氏の最初の上陸地は布良浜だったといわれる。忌部氏はこの地の男神山に天太玉命を、女神山にその妃・天比理刀咩命を祀ったとされる。そして養老元年(717年)に吾谷山のふもとに遷座し、上の宮にこの二神を祀り、下の宮には天富命と天忍日命を祀ったのである⁶⁾。

安房神社に関するこのような来歴を踏まえていえば、養老元年に安曇、忌部の習合が起こったといえるのではないか。それとともに、メカリがミカリと発音されるようになって、海人のトーテムとしてのメ(ワカメ)のことなど忘れ去られてしまい、カリという言葉から狩猟のことが類推されて、それが由布津主命と忌部氏の故事に結びつけられて、今日に残る伝承へと変化したということだろう。

第3節 ミカリの拡大

1. 上総への波及

すでに触れたように、ミカリ神事は安房神社から周辺の神社へと伝わっている。その概要について簡単にみておきたい。

●洲宮神社（館山市洲宮921）

主祭神は天比理乃（刀）咩命で、相殿に天鈿女命と天富命を祀る。ちなみに、天鈿女は天富命と天比理乃咩命を両親とする。もちろん忌部系の神である。

ミカリ祭は「御狩祭」といい、旧暦11月27日から12月3日までがその期間である。初日を「イチノビ」といい、「境内に別棟の籠もり屋があり、イチノビに若い衆が集まりお籠もりをしました」という。「現在はイチノビに限り、神事がいとなまれるだけです。イチノビの午前中に、旧戸の30数戸を中心に新戸の20戸ほどを加えた約50戸の氏子が三々五々、洲宮神社にお参りに行きます。氏子たちは千円の初穂料を出し、それで一年の祭りの費用を賄っていますが、昭和の末年までは、各戸が二升ずつの米を持ち寄り、一年間の祭りの際に用いたといいます。午後3時過ぎ、社殿のなかで一通りの神事が行われ、その後に境内の西の隅、西に向けて竹に幣束をはさんで立て、米と塩と御神酒をまいて清めます。」

とはいえ、物忌みの習慣は残っていて、「イチノビにはワラや竹、ほうきを触ってはいけません。昔は牛馬の餌となるワラを事前に刻んでおき、あらかじめ家の内や外を掃いておいたといいます。また、洗濯をしないという家もあります。ミカリの期間を通じて、女性は針仕事をしてはならず、針を持つと手が腫れるとされ、特に厳しく戒められていましたが、生活様式の変化によって、現在では生活への影響は少なくなっているようです。

しかし今日でも、イチノビの11月27日に、勤め人が仕事に出かけることがあっても、農業にたずさわる人は、田畑にでることはありません。稲作中心の昔は、この時期に農作業はさほどありませんでしたが、花作りやレタスの栽培が盛んな現在は忙しい時期です。それでもこの日は、洲宮の畑に人影は全くありません。現在でもイチノビに、むやみに田畑に出てはいけないという習慣が守られているのです」という（以上、館山市、2012）。

●羽雄神社（木更津市茅野786）

羽生大明神ともいわれ、主祭神はヤマトタケルである。羽雄神社を鎮守とする木更津市茅野地区では旧暦11月26日から12月5日までの10日間を「みかはり十日」といい、物忌みする。この期間は、ヤマトタケルが鹿野山の賊を攻めて滅ぼしたことに由来するという。とはいえ、この習俗は現在では受け継がれていない（藤澤、1917：296-297）。

先に挙げた木更津市高柳、袖ヶ浦市三ツ作、市原市五井のミカリ、ミハリの伝承はいずれも物忌みの行事であった（牧野、1995）。また、勝浦市の滝口神社（勝浦市部原1921）では、木更津市茅野と同じくヤマトタケルと関連づけられて、ヤマトタケルの悪蛇退治の故事によって御狩神事が執り行なわれている。いずれも安房神社の神

事の影響がみられるが、地域ごとに少しずつ変化していることも確認することができる。

2. 東京湾を隔てて対岸へ

ではこれらの地域からの拡大はあるのかというと、東京湾の対岸の多摩川流域の世田谷区（喜多見）、大田区（荏原、久が原、鷯木町）、川崎市（生田、菅生、柿生）、横浜市（港北区、緑区、鶴見区など）では「ミカリ婆さん」の伝承として残されている。

その伝承は地域によって若干の変化はあるが、ここでは横浜市港北区に伝わる代表的な伝承について触れておきたい。この地域では、12月8日を「ヨーカブー」、「ヨーカドー」とか「コトヨウカ（事八日）」と呼び、この日の夜にメカリ婆さんがやって来る、という。平井（1999）から、横浜市港北区鳥山町裏ノ谷戸および太尾の棒田谷戸の伝承を引用しておこう。

「ミカリ婆さんは一ツ目で、目の多いものを恐れるので、ザルや篩（とおし）を棟（むね）に上げたり、戸口に出したりします。ミカリ婆さんは村々を回り箱根（はこね）まで飛んでいき、山にぶつかって海へ落ちたので箱根より西へは行きません。ヨウカドウも同じもののだといわれています。また、太尾（ふとお）の棒田谷戸（ぼうだやと）では、ヨウカドウが千の眼で屋根の上を通りながらにらむので、籠（かご）か目ザルを屋根に出すといっています（『港北区史』）。

この伝承について、平井（1999）は「コトヨウカの『コト』とは、元来は祭（まつり）・斎事（さいじ）のコトであり、この日は、古くはコトの神が訪れて来るとして物忌み（ものいみ、外出などをつつしんで、からだがかげがれないようにすること）をしていたものが、いつの頃からか本来の意味が忘れられてしまい、家に籠（こ）もっているところから、一つ目小僧やミカリ婆さんのような怪物が来ると考えるようになったものです」としている。つまりミカリ婆さんのミカリは、ミカリ神事のミカリと共通の物忌みに由来するという指摘である。

では、房総の忌部氏との関連についてはどうか。ここで注目すべきは横浜市周辺に49社ある杉山神社の存在である（その所在地の分布は、横浜市緑区14、港北区9、保土ヶ谷区6、神奈川区4、南区2、鶴見区2、西区1、川崎市4、町田5、稲城市1、葉山町1、となっている）。その本社の候補の一つと考えられている茅ヶ崎杉山神社（横浜市都筑区茅ヶ崎中央58）は忌部勝麻呂の創建といい、房総の忌部氏とかかわりがある。この神社の神主、忌部義俱が文化12年（1815年）に幕府に提出した上申書によると、「安房郡安房神社の神主天日鷲命ノ孫由布津主ノ二十一代ノ孫忌部勝麻呂、人皇四十代天武天皇御宇白鳳三年秋九月信託ニヨリ武蔵国杉山ノ地ニ大祖高御産巢日太神、天日鷲命、由布津主命三柱ノ神ヲまつり鍵山神社ト号スト云」とあり、白鳳3年、すなわち674年に房総の忌部氏の一族が武蔵に進出したことを伝えている。ちなみにこの移住年代について、「中央において忌部氏が盛んになったのもこのあたりのころと推定される」（小寺、1994：58）という指摘もある。

だがこの地域における忌部氏の支配は安泰ではなかった。一つには中央において中臣氏の勢力拡大によって忌部氏が権勢を失い、それがこの地の忌部氏にも波及し、さらに平安時代末期には武士勢力が台頭し、忌部氏の支配地域である鶴見川流域には師岡氏や熊野の寺社勢力が拡大していったからである（小寺、1994：74-75）。

このような経過を踏まえてみると、ミカリ婆さんの伝承は次のように解釈できるのではないか。すなわち、房総から移住した忌部氏は「物忌み」としてのミカリをもたらし、だがその後この地に進出して来た師岡氏や熊野の勢力は、そこに「一つ目」や「目の多いものを恐れる」といった製鉄にかかわる伝承を織り込んで、本来のかたちを変化させてしまった。

ミカリ婆さんにかかわるこの二つの異なる要素は各地に残る伝承を総合して考えてみることによっても確かめることができる。

まず、ミカリに込められた本来的な要素についてである。ミカリ婆さんがやってくるのは必ずしも「事八日」ではなかった。10月の三隣亡の日や、2月1日、12月25日、2月の節分などにやって来る、という伝承が残されている。そしてミカリ婆さんには土穂団子を供えるのだという。土穂団子というのはモミを集めて団子にしたもの、とする地域もあるが、本来はその年にとれた新米でつくった団子のことという⁷⁾。つまり稲の収穫によって一年間の農業が終わり、新たな年に向かう切れ目の時期にミカリ婆さんがやって来るのである。「チジュウダンゴ [土穂団子-引用者] をつくる日は、新年の年神を迎えるための物忌み」(牧野、1995：97)の日だったということである。

このような意味でのミカリ婆さんの来訪日とは「御斎」と「和布刈」が一体となった一日とみることができる。土穂団子は和布刈神事において採取される新年のワカメに相当するものなのである。その点で、ミカリ婆さんの本来的な伝承形態は海人の信仰の農業的形態を示すものといえるだろう。

次にミカリ婆さんの製鉄的な要素である。ミカリ婆さんは事八日あるいはヨーカゾーにやって来る、一つ目である、目の多いものを恐れる、といった要素に加えて、火にかかわる要素がみられる。例えば、ミカリ婆さんには三人の子供がいたが、留守中に家が火事になって三人とも焼け死んでしまったとか、ミカリ婆さんが来る日には火を使うな、とった伝承である。

こうした「火の禁忌」について、「火は最も穢れを媒介する」とみる指摘もある(牧野、1995：97)。だがこれは製鉄にかかわる伝承とみる方がよいだろう。事八日やヨーカゾーとは農業が終わり、本格的な冬に向かって製鉄を始める時期を示している。この日、鍛冶屋では火入れが行なわれる⁸⁾。そして鍛冶師は作業中には鬼になり、また一つ目にもなる。それに対して、農家をはじめとする一般家庭では火の禁忌を守り、鬼や一つ目が来ないように静粛にすることが求められる、というわけである。

3. 人見は一つ目か

そこで次に、一つ目の伝承を追ってみることにしよう。まず、上総の一つ目伝承の候補地として人見山を取り上

げてみたい。

上総のミカリ伝承にヤマトタケルが登場するのは、この地域の名峰・鹿野山における軍荼利明王との戦いを思い起こさせるものがある。鹿野山は金生山(柴田、1992：142)であり、上総の旧・君津郡は古代須恵国で、すなわち鉄の国を意味する(金、1984)、という図式で考えてみると、周辺地域の産鉄地に目が行く。そして鹿野山に源を発する小糸川を降ってみると、河口の人見山とその山頂の人見神社がやはり気になる(ちなみに小糸川の旧名は須恵川で、つまり「鉄が採取できる川」の意味であった)。この神社が妙見社で鉄とのかかわりが暗示され、また埼玉県旧名栗村の同一地名の人見地区も製鉄とかかわっていたことから、何かヒントがあるのではないか、と思った(井上、2009：20)。その後、ヒントが二つ増えた。一つは「人見」とは「一見」であり「一つ目」につづじるのではないか、ということ。もう一つは東京都府中市の甲州街道に沿って人見街道があり、その名称由来は何かという点である。

現・君津市の「人見」もまたヤマトタケルの伝説の地であった。それによると、人見はもとは「太見」で、ヤマトタケルがオトタチバナヒメを追慕した場所だという。ヤマトタケルは人見山の頂上で、海路を「ふと、み」「そなわしたまふ」たのだという(平野、1961：33)。その一方、入水死したオトタチバナヒメの着物のうち、袖が漂着したのが人見の北側、布が漂着したのが人見の南側で、人見を境に北を袖ヶ浦、南を布引浦と呼ぶ、という地名譚もあるようだ(平野、1961：37)。では、肝心の「人見」の名称由来についてはどうか、というと、平野馨は「国の所有者が国の様子を視察する場所」だという(平野、1961：39)。しかしそれならば、人見ではなくて国見というのが本筋というべきだろう。というわけで、君津市人見の表層だけみても「一つ目」の話は何もない。

そこで、別の手がかりを求めて、府中市近辺を走る人見街道の名称由来になったと思われる旧人見村に行ってみることにしたのだった。

4. 府中・人見と製鉄のかかわり

中央線の武蔵境から南西に西武多摩川線というローカル線が出ている。車両は4両編成のワンマン運転で単線、日中は12分間隔で運転しているようだ。武蔵境から二つ目が「多磨」という駅で、駅の脇にある踏切を横切るのが人見街道である。旧・人見村へはこの道を西にすすめばよい。

駅から離れるにつれて住宅地らしくなる。そして人見街道が多磨墓地の入口につづじる道路と交差すると間もなく、人見である。浅間通りとの交差点には石に銅板を埋め込んだ案内があった。武蔵名勝図会に描かれた浅間山(人見山)や周辺の地名、それに村の沿革が刻まれている。

この交差点から北上すると、人見稲荷神社。浅間山の南側に位置し、住宅地が隣接しているが、木立に囲まれていて静けさは保たれている。祭神は倉稲魂命、天下春命、瀬織津比咩命の三神というが、主神は兄武比(ニタケヒ)命で、これは武蔵国造の祖・兄多毛比命のことで

ある。つまり、古代につづるかは別として、武蔵国の開拓とかかわって祀られている、ということなのだろう。それに対して、倉稲魂命、天下春命、瀬織津比咩命は稲荷信仰との関連で祀られているはずである。

この神社の北側の森が浅間山である。山とってはいはるが、丘のようであり、少しも山らしくない。浅間山とは、堂山(79.6m)、中山(74.0m)、前山(72.8m)という三つの峰を総称した呼び方のようだ。このうちの堂山に浅間神社が祀られている。この神社は富士山の浅間神社を本社としている。富士山が望めることから、信仰が起こったものと考えられる。しかしこの山は人見山ともいわれ、それとは別系統の信仰もあったと考えられる。手がかりは、このあたり一帯を指す蛇久保という地名である。蛇の穴のような「坑口」を意味していて、製鉄に関係ありそうな地名なのだが、『朝日新聞』(第2千葉県域版)2010年12月4日付の「ふしぎ探検隊」をみていて、ひらめいた。これは武蔵野台地によくみられる「まいまいずの井戸」のことではないか、と。記事で取り上げられているのは青梅線羽村駅の近くにある五ノ神社境内の渦巻き型の井戸である。直径は16m、深さは4mあって、上から見下ろすとカタツムリのようにみえるので、まいまいずの名が起こった。「関東ローマ層の下に、多摩川により形成された砂礫層があり、崩れやすい。井戸掘りの技術が未熟だった昔は、筒状に掘り下げるのが難しかったため、すり鉢状に掘るのが安全だった」という。このような形状をもった井戸をカタツムリとみなすか、蛇とみなすかはそれほどの違いがあるわけではないだろう。『角川日本地名辞典』(13 東京)によると、人見山の南麓から「澗泉湧出」とあるので、これが蛇久保とかかわっていると考えられる。

なお、羽村のまいまいずの井戸は中世に掘られたもののようなのだが、「大同年間」に開削されたという伝承があるという。谷有二はこの点に注目して、この伝承と熊野山伏とのかかわりについて指摘している。熊野山伏といえば金属とつながるのだが、「水脈と鉱脈探査の技術は表裏一体のもので鑄物鍛冶も常に水と深い関係をもっている」としている(谷, 1983: 212)。

では、人見村と鉄の関係はどのようなものなのか、と追究してみたい。例によって「物証」ははっきりしないのだが、村に残る地名は製鉄との関係を示唆している。それはまず、吹上(フキアゲ)、吹廻(フキマハシ)、吹出(フキダシ)、それに風巻(カザマキ)といった「風」にかかわる名称である。おそらくタタラ製鉄で必要とした風が反映したものだろう。もう一つは宗教的な地名で、稲荷台というのは人見稲荷とかかわると思われるが、この稲荷も「鑄成」につづるし、また幸福寺(廃寺)には観音堂が祀られていたということで、「鉄穴」(カンナ)とのかかわりが推測できる。

さらに、決定的とも思えるのが、人見稲荷神社に伝わる「ヨウカゾウ」の伝承である。ヨウカゾウとは1月8日のことを指し、この日に一つ目小僧が目玉を取りに来るといい伝えられていて、それを防ぐために、目の粗い籠を竹の先につるしておくのだという。これは、節分のときにヒイラギにメザシの頭をつるして鬼を防ぐ、というのと類似した風習だが、一つ目小僧も鬼も根底におい

て製鉄とかかわっている点で共通性がある。

すでに触れたように、ヨウカゾウという名称は、「東京都南部から神奈川県東部」に多く伝わるという(牧野, 1993: 93)。ただ、その日は2月8日だったり、12月8日だったり、8日という共通項はあるものの、どの月なのかは一定しない。

その一方で、これは「ミカリ」の神事とつながる。ヨウカゾウはミカリが潜在的にもっていた製鉄の側面が強く現われ出たような風習、とってよいかもかもしれない。そしてもちろん、房総半島ともつながっている。それと併せて、「人見・一つ目」説も有力になってきた、とってよいだらう。

第4節 結語

ここでは西から東への文化の伝播という観点からみて、長門・住吉神社に伝わる御齋祭と和布刈神事という二つの祭祀を依拠すべき基準にとった。これは年を送り、新たな年を迎える一連の祭事である。

これが房総半島に伝わると、メカリはミカリへと転訛し、同時に忌み籠りに集約され、カリからの連想で狩猟と結びつけられる一方で、土穂団子の習俗が残る袖ヶ浦市周辺地域では、農業における年越しの神事にも変容していった。いずれも、その内実は御齋祭と同等のものが引き継がれたのである(牧野, 1995: 94, 96)。なお、房総におけるミカリ神事のなかで勝浦市の滝口神社の御狩神事はユアリ神事ともいわれ、「もと弓を洗う式があったからというので弓祭りとも称するが、弓とは『齋』(ユミ・イミ)の祭りであつたらしい」(牧野, 1995: 91)との指摘は、オイミとメカリが混然一体となった姿を示していて興味深いものがある。ちなみに、下関市の住吉神社の御齋祭でも「オイミの神様」は「オユミの神様」ともいわれている。勝浦ではオユミが弓と解釈されているわけである。

ここから東京湾の対岸へと伝わると、御齋祭の性格は保持しつつもミカリはミカリ婆さんへと変化し、そこに製鉄伝承的な要素を含みもつところとなった。

年の終わりの物忌みというのはおそらく冬至へとつながる太陽活動の衰えと深く結びついているだろう。この時期に仕事を休み静粛に過ごすということは生命活動の源ともいべき太陽の復活を願うことにつづる。

本格的な冬を迎えれば農作業も終わりである。それに対して、ミカリ婆さんのヨーカゾーは製鉄作業の開始を暗示する。「八」という数字は観音信仰において特に好まれる数字というが、この観音信仰の担い手はカンナ(鉄穴)の従事者であった。

いずれにしても、これらの地域に残されたミカリにかかわる神事や伝承はその根底において安曇氏や忌部氏といった海人族と製鉄の結びつきを示唆している。

<注>

1)「サバシ」については天富命の15代のちの子孫「佐賀斯」を指している可能性もあるが、狩猟とのかかわりの方が深いと考えられる。

- 2) これらの神社のうち、羽雄神社と勝浦の滝口神社については本文でも触れる。諏訪神社は嘉祥元年(848年)藤原政業が信濃から勧請したとされる。上社と下社に分かれ、祭神はそれぞれ建御名方命、八坂刀賣命である。坂戸神社は創建年代不明だが、ヤマトタケルの東征の折り、この神社に祈願したという話が伝えられている。祭神は、天手力雄命、天兒屋根命、天太玉命である。笹子神社もヤマトタケルを主祭神としている。莫越山神社は彦狹知命と手置帆負命を主祭神とする忌部系である。
- 3) 関門海峡の下関側に伝わる和布刈祭は、次のような神事である。「住吉神社鎮座のはじめ、壇之浦の和布をとって元旦の供え物として献上した故事にはじまったと伝えられています。その神事は極めて厳かで、さまざまな秘事は今でも厳しく守られ、近年まで氏子の間でもその禁忌が守られていました。壇の浦から刈りとってきた和布は、この日の参拝者が拝受することになっています。夜明けから屋台が軒を連ね、農具や苗木の市が立って、境内から参道にかけて参拝者でにぎわいます」(黒瀬監修, 1989: 25, 原文のまま引用)。
- 4) 御斎祭はおよそ次のような神事である。「神功皇后が、斎宮に七日七夜、斎ごもりした、故事にちなんで、12月7日の夜から15日の朝まで、住吉神社の特殊神事として千数百年来、承継がれてきました。神社の秘祭だけでなく、氏子の間でも、近年まで、野良仕事をやめ、物音をたてず、不浄をきらう戒めをきびしく守ってきました。今でも、神職は一步も社外に出ることなく、境内の周囲に注連縄を張りめぐらし、期間中は一般の人の出入りも禁止されています」(黒瀬監修, 1989: 29)。
- なお下関市内の住吉神社近辺でも御斎の神事がない地区もある。小野、井田、田倉の各地区である。小野、井田地区にこの神事がないのは神様が集落の下の「えぼし岩」のところで烏帽子を落としてしまったため、引き返したからだといわれている。また田倉地区にないのは上勝谷までやって来た神様がそこで鶏の声を聞き(聞いた場所を鳥越という)、夜が明けると判断してお宮に帰っていったからだという(黒瀬監修, 1989: 29, 参照)。
- 5) 下関市前勝谷のオイミ岩を探しているとき、一人のお婆さんに会ったのだが、「オイミの神様」を「オユミの神様」と発音していたことが印象的だった。なお、「おいみ岩」の由来に関しては、次のような話としてまとめられている。「お斎に関する伝承として、前勝谷下り松の竹藪の中に、『おいみ岩』があります。老婆がお斎の夜、禁忌をやぶってこっそり洗濯に出かけたところ、運悪く、みまわりにこられた神様にであり、持っていたたらいの下にかくれたのですが、神さまがこの上を踏み越えられたので、石になったと伝えられています。蹄のあと、老婆が背負っていた赤子の足跡が残っているそうです」(黒瀬監修, 1989: 29, 原文のまま引用)。
- 6) 忌部氏の上陸地、布良崎には現在、布良崎神社が祀られている。主祭神は天富命で、のちに須佐之男尊と金山彦尊を合祀している。この二神は製鉄とのかかわ

- りが深く、忌部氏の鍛冶とのかかわりを示唆している。
- 7) 土穂団子とは文字通り、脱穀したあとに残る粃殻を挽いて固めた団子のことである。ツジョウダンゴ、ツツボダンゴ、ツボダンゴ、ツボモチ、ツンジョウダンゴなどとも呼ばれている。袖ヶ浦ではチジュウモチと呼ばれるが、ミカリ婆さんとの直接的なかわりはないとされる(牧野, 1995: 96)。港北区鳥山町裏ノ谷戸では、12月8日に一つ目のミカリ婆さんがやるとされるのだが、興味深いことに、そのとき粃をもって来るのだという。
- 8) この点とかかわって、かつて四街道市亀崎の鍛冶内集落で毎年1月7日に行なわれていた「かじちのひもとき」について、次のように指摘したことがある。「年末近くに火を入れる、とは、どういうことなのだろうか。思い当たるのは『フイゴ祭り』である。鍛冶師たちは農作業の終わった晩秋から初冬にかけて、炬に火を入れ、作業を開始する。フイゴ祭りはその仕事始めのための祭礼である。その点を踏まえると、『ひもとき』は本来は『火ほどき』で、そういった鍛冶師の祭礼を受け継いだものといえないだろうか」(井上, 2011b: 217)。

<文献>

- 藤澤衛彦編, 1917, 『日本伝説叢書 上総の巻』日本伝説叢書刊行会。
- 藤澤衛彦編, 1919, 『日本伝説叢書 安房の巻』日本伝説叢書刊行会。
- 平井誠二, 1999, 「一つ目小僧とミカリ婆さん」港北区区民活動支援センター『楽遊学』57(1999年12月号)。
- 平野馨, 1961, 『房総のやまとたける』房総民俗会。
- 平野馨, 1982, 『伝承を考える - 房総の民俗を起点として』大和美術印刷出版部。
- 井上孝夫, 1998, 「安房地域の基層文化——海人と修験道を中心に」『千葉大学教育学部研究紀要』(人文・社会科学編) 46: 19-27。
- 井上孝夫, 2008, 『房総の伝説を「鉄」で読む』千葉日報社。
- 井上孝夫, 2009, 「伝説をめぐる旅」『環境社会学研究』16: 17-41。
- 井上孝夫, 2011a, 「伝説をめぐる旅(パート3)上総地域編」『環境社会学研究』18: 3-12。
- 井上孝夫, 2011b, 「鉄の民俗からみた四街道」『千葉大学教育学部研究紀要』59: 213-221。
- 井上孝夫, 2015, 「木村勘一郎さんのこと」『環境社会学研究』22: 30-37。
- 井上孝夫, 2020, 「ミカリ神事と御斎祭」『環境社会学研究』27: 21-28。
- 金達寿, 1984, 『古代日本と朝鮮文化』筑摩書房。
- 木村勘一郎, 2010, 『ふるさと下関ふるさと勝山』木村勘一郎記念郷土史文庫。
- 黒瀬圭子監修, 1989, 『勝山あれこれ』。
- 牧野眞一, 1995, 「ミカリ伝承について」『日本民俗学』196: 89-101。
- 小寺篤, 1994, 『鶴見川・境川 流域文化考』230クラブ

- 新聞社。
- 大島建彦, 1961, 「安房神社のミカリ——千葉県館山市大神宮」『西郊民俗』18：1-3。
- 柴田弘武, 1992, 『風と火の古代史——よみがえる産鉄民』彩流社。
- 鈴木理生, 2003, 『江戸・東京の川と水辺の事典』柏書房。
- 谷有二, 1983, 『日本山岳伝承の謎－山名にさぐる朝鮮ルーツと金属文化』未来社。
- 館山市, 2012, 「房総のミカリ習俗」。
- 館山市史編纂委員会, 1971, 『館山市史』国書刊行会。